

# グリーンルーフ

鹿児島市立美術館だより

館藏品誌上ギャラリー㊟



藤島 武二「鳥羽の日の出」1931年

## 表紙の作品

藤島 武二(1867~1943)  
「鳥羽の日の出」

1931年 油彩・キャンバス 72.8×100.0cm

もともと日本画を学んでいた藤島は、明治22年の明治美術会結成と相前後して、22歳で、かねてよりの願いどおり油彩画家に転じた。彼は、画面に込める作家の思い(エスプリ)の重要性を述べ、忠実な自然研究とその構成要素の単純化(サンプリシテ)、効果的な画面構成など、独自の厳しい絵画哲学にのっとり、写実絵画の本質を究めようとした、まさに近代日本洋画の第一人者である。

藤島の作画活動は、前半期を女性像を中心とした装飾的な人物画、後半期を日の出を中心とした風景画と、大きく二分して考えられることが多い。1928(昭和3)年、昭和天皇の即位を記念し、御学問所を飾る油彩画の制作を依頼された藤島は、当時60歳。その作品のテーマを日本を象徴する旭日と決め、それから10年余り、理想の日の出を求めて国内外を取材した。この間、国内においては北は蔵王から南は台湾の新高山(当時は国内)まで、瀬戸内海、潮岬、大洗海岸、五剣山、室戸岬など数多くの海と山の日の出の風景が描かれた。本作品は、この写生旅行の際に描いた習作(「鳥羽の日の出」1930年32.0×44.0cm)をもとに仕上げられた作品と考えられる。朝熊(あさま)山から鳥羽を臨む悠然とした海の日の出は当初から水平線に近い新しい赤い日の出を求めていた藤島の趣向に合った光景であり、「海は岬とか陸とか岩が対照的な存在としなくては、海自身に力点がない」という藤島の考え方を物語る作品でもある。簡潔な構図と力強い筆致に藤島の画風をうかがうことができる。

多くの習作の末、内蒙古のドロンノールの日の出に取材した、献上画「旭日照六合(きよくじつりくこうをてらす)」は、1937(昭和12)年に完成した。

## 鹿児島市立美術館

〒892-0853  
鹿児島市城山町4-36  
TEL. (099) 224-3400  
FAX. (099) 224-3409

